

研究ノート

# 外来語研究における研究課題の探究

## ——『明解国語辞典』『三省堂国語辞典』の比較を手がかりに——

朱 大 榮

### 1. はじめに

#### 1.1 研究背景

近年、外来語は日本社会において多く流入し、使用されており、日常用語に限らず、ビジネス、ファッションなどさまざまな分野で活用されている。国立国語研究所による『現代雑誌九十種の用語用字』の調査（1964）によると、異なり語数の固有成分の和語の割合は36.7パーセントであるのに対して、漢語は47.5パーセント、外来語は9.8パーセント、混種語は6パーセントと、外来語は全体の約10分の1を占めていることがわかる。これは、日本人が言葉で物事を表現をする際に外来語が重要であることを示しており、また、外来語を研究することの意義を示している。

また、「外来語」を各データベースで検索すると、国立国語研究所日本語研究・日本語教育文献データベースでは1648件、CiNiiでは1381件、J-STAGEでは2330件のヒット件数があり、外来語が研究対象として着目されていることがわかる。

#### 1.2 研究目的

本研究では現代における外来語の流入や意味変化に関する研究課題を探索することを目的とする。時代を追うごとに様々な文化や知識が流入し、その分、外来語の語数が増えていくことは想像しやすい。また、流入した外来語は日本独自の意味変化をする場合もある。木村（1997）は外来語を日本語の語彙体系として位置付けるにあたって確認すべき点のひとつに「言語より意味が拡大・縮小・変化する場合がある」ことを挙げている。意味変化の例として「ドライブ」という語が挙げられる。「ドライブ」を『三省堂国語辞典第7版』で引いてみると

ドライブ（名）①自動車などを走らせ〈る／て楽しむ〉こと。

と記載される。しかし、本来の意味を知るために英語辞典『ウィズダム英和辞典 第二版』（2007）を引くと

1 〈人が〉〈自動車〉を運転する

2 〈人が〉《…へ》〈人〉を送る

と記載されており、「楽しむ」に該当する意味は記載されていない。英語母語話者がこういったニュアンスで使用しているかは不明であるが、いずれにせよ、日本人から見て「ドライブ」

は娯楽という含意を前景化した語、へと変化しているのである。このように、日本において外来語は流入や廃語するだけでなく、意味変化を起こしていることが分かる。このような課題があることをふまえ、さらに課題を探索していくことを目的とする。

### 1.3 研究方法

本研究では外来語の研究課題を探索するアプローチの1つとして試験的に、現代語中心の小型国語辞典である『明解国語辞典』（三省堂1948）（以下、『明国』）と『明国』をもととし、新語を数多く収録している後継辞書の『三省堂国語辞典第7版』（三省堂2014）（以下、『三国』）の2冊を比較し、外来語の流入と意味変化を追っていく。

#### 1.3.1 辞書の選定理由

辞書を選定するにあたって重視したことは幅広い分野で現代語としての外来語を扱っていることである。小型国語辞典と呼ばれる国語辞典はいくつかあるが、そのなかでも条件を満たしているのは『三国』であると判断した。『三国』と源流を同じく『明国』とする、『新明解国語辞典第7版』（三省堂2019）の編集方針に「現代の言語生活において最も普通に用いられる日本語」との記載があり、さらに、新語よりも語の意味の記載についての多様さを重視する旨が記されている。それに対し、『三国』編者である見坊豪紀は序文において、さまざまな立場の人の要望に応えたこと、見出し語を多く制限しないこと、現代の新鮮な言葉を多く含むこと、を編集の方針として記している。それらの方針を引き継ぎ、最も新しい版である第七版を使用することにした。

『明国』は『三国』の源流とされており、編者は見坊豪紀、出版社は三省堂であることが共通点である。また、『明国』序文にも新語を多く取り入れた旨が記されており、『三国』と比較するに十分であると判断した。

#### 1.3.2 比較の手順

手順は以下の通りである。

- ① 『三国』から外来語（カタカナ語）を抽出する
- ② 『明国』から外来語（カタカナ語）を抽出する
- ③ ①と②の結果を比較し考察する

手順③を行う際、以下のようなパターンが考えられる。

	『明解』での立項	『三国』での立項
A	あり	あり
B	あり	なし
C	なし	あり

また、単純な立項の有無だけでなく、意味変化なども視野に入れるため、上記の表をもとに以下のように語を分類することができると考えられる。

- A I 『三国』『明解』に立項。大まかな意味変化なし。
- A II 『三国』『明解』に立項。意味変化あり。
- A III 『三国』『明解』に立項。意味に追加の記載がある。
- B I 『明解』のみ立項。
- B II 『明解』のみ立項。別の語で代用されている。
- C I 『三国』のみ立項。
- C II 『三国』のみ立項。別の語の代用である。

### 1.3.3 外来語の定義

ここでいう外来語とはカタカナ語を指し、『三国』の外来語を示す表記に従う。外来語の広義は日本語以外の言語から借用した語であり、狭義は欧米語から借用した語を指す。カタカナ語はカタカナ表記であればカタカナ語に含まれる場合があるため、各辞書の語源となる国の表記を確認し、借用した語であることを確かめてから入力する。

## 2. 先行研究と諸課題

山田（2005）は『外来語の社会学』において外来語を「通常カタカナ書きされ、かつ、われわれが外来のものとして日常的に意識する、あるいは意識できる言葉」と定義しており、また、「現在のわれわれの生活は、もはや外来語抜きでは成り立たない。（中略）現代の日本人は、不感症とは言わないまでも、外来語に対して明らかに鈍感になっている。外来語が大衆化したせいである。」と述べている。この内容は近代における外来語の一般化と流入の激しさを示しており、外来語の調査が日本のあらゆる分野における発展、また一般化の歴史を辿るのに有用であることが考えられる。さらに、金（2006）は自身の論文で

外来語の増加は、20世紀の日本語語彙に生じた最も大きな変化の一つであろう。いくつかの経年的な語彙調査は、その様子を具体的に示してくれる。たとえば、1906～76年の雑誌『中央公論』を10年おきに調べた国立国語研究所1987の語彙調査、「現代用語の基礎知識」の見出し語を1960年版と80年版とで比較した野村雅昭1984の調査、戦後の朝日・読売両新聞の社説を対象とした橋本和佳2004の経年調査など、いずれも、外来語のとくに20世紀の後半における確実な増加を明らかにしている。

このような外来語の量的な増加は、日本語語彙に占める外来語の比重が大きくなったということだけでなく一部の外来語が「基本語彙」の中にも進出して来ている（「基本語化」している）ことを予想させるものである。実際、国語研究所の「月刊雑誌70種の語彙調査」（1994年）でも、高頻度・広範囲に使用される語群の中に数多くの外来語を見出すことができる（山崎誠2001）。（中略）語彙調査の結果などによれば、20世紀の後半には、外来語の増加に伴って、少なからぬ外来語が基本語彙の中に進出したと推測される。そうした外来語の多くは、生活の近代化に伴って借用され、多用されるようになった具体名詞

であるが一方では、抽象的な意味を表す外来語の中にも、雑誌や新聞などで数多く用いられるようになり、基本語彙の仲間入り（基本語化）をしたとみてよいものがある。と述べており、外来語が基本語彙として調査対象になり得ることを示しており、また、外来語が増加傾向にあることも明白にしている。また、陳ほか（2011）は外来語の役割を以下のよう

- に4つに分け指摘している。
- (1) 国文化の享受…外来の事物が社会を便利にし、文化や学問などを発達させる。
  - (2) 新たな概念の素早い導入…学術語・専門語の分野を中心に経済や生産などの向上に寄与する。
  - (3) 斬新な感じ…よいイメージが付与される。ニット（編み物）、プロジェクト（企画）
  - (4) 婉曲表現…従来の語の言い替えに用いられる。マッサージ（按摩）、インナー（下着）
- このことから外来語が日本に流入するに至って社会にいかに大きな影響を与えているかが察せられる。

外来語の研究課題を考えるにあたり、1章2節で触れた木村（1997）は以下のように述べており、①と②は一旦置いておくにせよ、③と④においては語一つ一つにおいて探究可能であることから今後も残る課題であると考えられる。

（中略）言語にさかのぼる研究のほかに、次の諸点において外来語を日本語の語彙体形の一部を担うものとして位置付ける必要があるだろう。すなわち、

- ①日本語の音韻構造に合わせて定着すること
- ②日本語の文字によって表記すること
- ③言語より意味が拡大・縮小・変化する場合があること
- ④日本語の語彙体系に組み込まれた単語は造語活動にも加わること

### 3. 調査結果

先行において抽出出来た語数は、『明国』601語、『三国』1160語である。そのうち、パターンAにあたる語は375語、パターンBで226語、パターンCは785語であった。次節からは、各パターンの抽出例を一部示していく。

#### 3.1 AIについて

AIに該当する語として「エキス」が挙げられる。『明国』では、

- ①薬物や食物の有効成分を濃厚な液髄にしたもの。精。
- ②精粹

と記載され、『三国』では

- ①薬や食べ物の有効成分を、こい液体にしたもの。精。
- ②精粹

と記載される。記載に多少の違いはあるが、大きく意味の変化はしていないと判断した。

### 3.2 A IIについて

A IIに該当する語として「インフルエンザ」が挙げられる。『明国』では、

(医) 流行性

と記載され、『三国』では

ウイルスによる急性の感染症。高い熱が出る。冬、よく流行する。流行性感冒。流感。流行りかぜ。

と記載される。両辞書とも医学用語として扱っていることに違いがないが、『明国』では性質を示す名詞、『三国』では風邪の固有名詞として扱っている点に違いが見えるため、意味変化として判断した。また、意味拡張が行われていると判断し、「ウインク」をA IIとして挙げる。『明国』では、

めくばせ、まばたき。

と記載され、『三国』では

片目を軽くとじてする合図。「-式信号」

と記載される。基本的に大きな意味変化はないが、『三国』には「ウインク式信号」という用例が付け足されている。これは、ウインクと点滅というメタファー的意味拡張による用例であるため、意味変化として捉えることとした。

### 3.3 A IIIについて

A IIIに該当する語として「アポロ」が挙げられる。『明国』において

ギリシャ神話の主神。日の神。

と記載されるが、『三国』では

①音楽・予言・医術、または太陽の神。

②一九六九年に月面着陸を実現した、アメリカの月面探査機。

と記載される。『三国』における意味②は社会出来事によって本義とは違って探査機の名前自体が有名になり、意味が追加されたものである。

### 3.4 B Iについて

B Iに該当する語として「アアガスカメラ」が挙げられる。『明国』において

前方を向いてひそかに横を寫し得る、望遠鏡型の寫真機。探偵カメラ。

と記載される。「アアガスカメラ」とはひと昔前にアアガス社という会社の販売していたカメラの名称であるが、現在では「クラシックカメラ」に分類されている時代の古いカメラである。上記のように『明国』においては立項されるほどカメラの代表格的存在であったのであろうが、現代の『三国』には立項されていない。

### 3.5 C Iについて

C Iに該当する語として「ウイドー」が挙げられる。『三国』において

未亡人。やもめ。ウイドー。  
と記載される。「ウイドー」という言葉自体は存在していたであろうが、日本語にどのような経緯で流入したのかは不明な語である。

### 3.6 考えられる課題について

以上のような調査から次の課題が考えられる。

- ①外来語のメタファー的拡張とはなにか（例：ウイंक）
- ②外来語の社会背景による意味の追加とはどのようなものか（例：アポロ）
- ③外来語のコノテーション／ディノテーションに基づく意味変化とはなにか（例：ドライブ）
- ④流入の経緯や背景のわからない外来語をどのように扱うか（例：ウイドー）

## 4. おわりに

『明国』『三国』との比較で4つの課題を挙げた。しかし、どの課題も他の例を示すことはまだできておらず、また、探究のみで止まっていることもあり、外来語そのものの性質を解明できる課題であるかは不明である。今後は、あ行以降の語を比較するとともに、これらの課題の研究を進めて行きたい。

### 参考文献

- 飯間浩明（2014）『三省堂国語辞典のひみつ』
- 飯間浩明（2014）「『三省堂国語辞典』初版の版で項目はどのように決まったのか」『国語語彙史の研究三十三』 pp. 47-64
- 金 愛 蘭（2006）「外来語「トラブル」の基本語化—20世紀後半の新聞記事における—」『日本語の研究』第2号2巻
- 小池清治ほか（編）（1997）『日本語学キーワード辞典』朝倉書店
- 今野真二（2014）『辞書から見た日本語の歴史』筑摩書房
- 今野真二（2018）『日本国語大辞典を読む』三省堂
- 陳力衛ほか（著）（2011）『図解日本の語彙』三省堂
- 前田太郎（1922）『外来語の研究』岩波書店
- 松井栄一（2005）『国語辞典はこうして作る理想の辞書を目指して』港の人
- 丸山直子（2007）「辞書編纂談議～水谷静夫先生が語る～」『特定領域研究「日本語コーパス」平成18年度研究成果報告書』 pp. 1-92
- 山田雄一郎（2005）『外来語の社会学～隠語化するコミュニケーション～』春風社

付記 本原稿は、2021年12月16日（木）開催の大正大学大学院国文学専攻研究発表会の口頭発表をもとにしている。